



栗香齋叢書 辛丑九月終

記憶

秘

再號 共二冊

早稲田大学図書館

文書 27

B 80



朝鮮紀事

四年	七月西御木元任參議廢禱大隈按察使
五年	大久保伊弉丹奉心中御書次 <small>上陸早三歲</small>
六年	十月征韓論老鄒去例 <small>西御早七歲</small>
七年	甚涉問罪大久保到清國
八年	江華島砲擊 <small>川村在後</small>
九年	黑田井上正副公使到韓廷和約成 <small>川村其人後</small>
十年	西南大亂老西御勅死于薩州城山 <small>五十五歲</small>
十一年	大久保勅死于清水 <small>五十五歲</small>

元年大久保三十九歲
二年
三年

二十一年 阮陳廢漢 米回舊統 顧到東京

二十二年 朝鮮信使 金克集 李祖淵 至

二十三年 魚允中 洪英植 等至

二十四年 朝鮮大院君 黨燒 致公使館 花房等 僅免

二十五年 金玉均 林泳 等謝罪 等至

二十六年 竹添公使 渡韓 五日 清兵 戰于 京城

二十七年 即 藤到 清國 井上 到朝鮮 修好

二十八年 北洋艦隊 到長崎 水手 等 查閱

二十九年

二十一年

二十二年

二十三年

二十四年

二十五年

二十六年

二十七年

二十八年

二十九年

擊雨諾太子於天津。不設是米積瀆

出兵于朝鮮與清國戰于山平壤皆陷
四月十七日媾和成

三年

三年

獨曰領照州滿露國借施順口

露人橫恣朝鮮 大院君薨

清廷起外債

三年

三年

三年

三年

三年

乙丑 黑留より長州に到るに伴

黒留曰長州に到りては、物なき、安易に罷りて、寧ろ汝彼を助

けて前通を湯に不如、乙丑に秋高師より軍行告

之、脱城を訪て、毛利侯より、西海へ木戸を渡り、為京

師到り、西郷より命せたり、木戸西郷物も、亦あり、長州に

先づ自ら一藩を固結し、幕軍より、亦あり、力竭て罷り

たりん、其抄後を誣せし、是を、福力勉、此等、市の悪博、と

征州を依て、幕軍に、股肱を、断つ、上策、以、亦、幕軍命

を、後、行、長、幕、府、必、代、長、後、薩、州、を、依、つ、所

伊地知、亦、其、所、也、

丙寅の件

薩州征長と出兵と断りたり再分て征長天理より
幕府征州と征留と白鶴州親為と出兵と
鍾孤等勢及此方何彦根柳原等賊軍
濱田自鏡城出た少少出たり老中山原
之山も荒州も今起り鐘身中在り九州
防備と指揮し防備初め胆肥坂前後解
兵

薩州より兵と率いて山原等も幕府より下
常死し防備兵所僅敷隻と此は薩州

榎原樂

出兵と断り甲子犯瀬と征長と氣勢と
年一此の天下に河北は薩州、徳島、安芸、備前、備中

自覚也

勝也甲子秋征留とありて謹慎閉居し家將
軍より直御殿、依り上坂薩州出兵拒命と征長
軍より来りせしと力多し征將軍大坂城に籠り
討り征長休兵と御勝切幕三命と白鶴州に

追記 高崎伊予守

部之在戊

九月十日	九月九日	九月八日	九月七日	九月六日	九月五日	九月四日	九月三日	九月二日	九月一日
				四日廿五日卯出着	九月初四日之 改了五片竹北一施之卯出着	九月初五日之 改了五片竹北一施之卯出着		卯出着之 改了五片竹北一施之卯出着	初九日 孝持河内守
本宮手紙 着方二本松着				城ノ奥ノ地流流ノ代ノ所 先ノ奥ノ自澤着	城ノ奥ノ地流流ノ代ノ所 先ノ奥ノ自澤着	城ノ奥ノ地流流ノ代ノ所 先ノ奥ノ自澤着	城ノ奥ノ地流流ノ代ノ所 先ノ奥ノ自澤着	城ノ奥ノ地流流ノ代ノ所 先ノ奥ノ自澤着	城ノ奥ノ地流流ノ代ノ所 先ノ奥ノ自澤着
所出之 改了五片竹北一施之卯出着	所出之 改了五片竹北一施之卯出着			其ノ奥ノ地流流ノ代ノ所 先ノ奥ノ自澤着	其ノ奥ノ地流流ノ代ノ所 先ノ奥ノ自澤着	其ノ奥ノ地流流ノ代ノ所 先ノ奥ノ自澤着	其ノ奥ノ地流流ノ代ノ所 先ノ奥ノ自澤着	其ノ奥ノ地流流ノ代ノ所 先ノ奥ノ自澤着	其ノ奥ノ地流流ノ代ノ所 先ノ奥ノ自澤着
御行ノ行	御行ノ行	御行ノ行	御行ノ行	御行ノ行	御行ノ行	御行ノ行	御行ノ行	御行ノ行	御行ノ行

孝持

松原製

大德破劫...
天皇御服...
和由人直達日接仍掛

六年 在左院

皇中... 在左院 改葬... 皇名

皇城... 皇名... 從大... 徑正... 沈潤... 錦

內湖... 皇名... 大傳... 仍... 錦... 了... 停

內湖... 皇名... 內湖... 皇名... 內湖... 皇名...

七年 在左院

皇名... 皇名... 皇名... 皇名... 皇名... 皇名...

皇名... 皇名... 皇名... 皇名... 皇名... 皇名...

皇名... 皇名... 皇名... 皇名... 皇名... 皇名...

皇名... 皇名... 皇名... 皇名... 皇名... 皇名...

皇名... 皇名... 皇名... 皇名... 皇名... 皇名...

皇名... 皇名... 皇名... 皇名... 皇名... 皇名...

皇名... 皇名... 皇名... 皇名... 皇名... 皇名...

左院廢止

八月新解江華島雲揚艦包船
并上此行
日本天皇
大隈元帥

九年

黑田清澄并露野新解出。監船交換
新解信使未解

天皇奥州巡幸

長州前原島居

肥後熊本社風連是而居

長州前原島居

八月新解長州木戸廣海之名何是
新解議上之廣政上之申上之契因
新解神面之可料一説、奇兵也
新解一与方、福昭、權、西天出等
新解上巳巳の吹、其、廣平、到、也
廣平、廣海、美、議、出、七、木、戸、与
沼院、出、行、与、東、勢、与、即、与、森、藤、与
与、大、久、保、前、廣、海、出、州、与、佐、木

肥前より副島へ行く議を出して即ち
舟より秋白島より梅六月十五日
し月七日係齋藤と申し隣生
し度母参議去る道は向年對照
し時山好狙外歐洲の船片にて
三塔文少少の候多矣海より山好
ちなる候とおし年一犯舟若松
好戦舟の取返船の事一日舟好

先生より申候程申す候し
歐羅巴海より去るべし山好三塔
舟好戦舟の取返船の事一日舟好
うしと申し候し申す候し
舟好戦舟の取返船の事一日舟好
舟好戦舟の取返船の事一日舟好
舟好戦舟の取返船の事一日舟好
舟好戦舟の取返船の事一日舟好
舟好戦舟の取返船の事一日舟好
舟好戦舟の取返船の事一日舟好

日月	日月	日月	日月	日月	日月	日月	日月	日月	日月
				丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日
				丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日
				丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日
				丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日
				丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日
				丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日
				丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日
				丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日
				丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日
				丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日	丑年十一月十日

明治廿年七月二十七日。在院。用之。抄
 下向。

左院

議長 一人

後藤象平

副議長 一人

江藤新平

壬申五月

少議官官島城一郎國憲創立
集會於左院之議院之右院之上
申す

五月廿五日始に府縣代理人ヲ以テ議院
充テ集議ヲ興シ以テ議院御決定相成制

紀元

取調會太政官より左院へ送る

壬申四月

官島議長國憲創立根元、我帝國是
獨裁ハ君民同治、中ヨリ是酌ニテ御確定相成
及起者ナリ

癸酉五月二日

太政官職制章程、編録了

右職制事務章程

裁制定スル所ナリ、之ヲ守リ其程限ニ懲
句

明治六年五月二日奉勅大臣三條實美
欽定，始于此

考議，內閣議官三條實美
當手

切明，始于此
制

太政大臣演說

演說，始于此
大臣地方官

甲戌五月二日

議院憲法公布

龍之谷

乙亥四月十日
和五郎

明治十年五月岩倉大臣より内書として面會
を求めし事殿に西軍我軍旺盛仍る米
澤備り上杉氏と説諭し二十一人に其
を拒方陸軍隊より身歩隊士族の階層階
級に別れ格別と改可なりと其族勝手に其業
を以てし目には其業を止めて戦闘を止む
自由を成し給はし給はし又同族を以て階層階
級士と歩隊用時隊を以て其業を以て上杉と
一方の大將より其族士族任用を以て其業を以て

明治十年五月

参議 兼外務卿	井上馨	工部卿	山尾庸三
兼南務長官	黒田清隆	文部卿	河野敏鎌
	山縣友朋	海軍卿	榎本武揚
	川村純義	大藏卿	佐野常民 ノ七人
	西郷従道		
右改革、地方會議後、	此改革、新、内閣、面目改、且		
新、省卿、任、田中、河野、佐野、三人			
此、榎本、大隈、岩倉、相謀、有、物、川、と、引、外、大久保、以後、之、			
全、権、を、野、薩、長、と、就、結、ん、ど、す、			

三十二年六月廿七號、

此、引、外、大久保、以後、之、還、事、十月、末、迄、

榎本海軍卿、為、海軍、實權、榎、川村、単、總、参議、ト、ス、

川村、心中、不平、自ら、謂、隠居、シ、リ、

榎本海軍卿、辞任、之、野、卿、有、之、再、内閣、分離、子、令、改、

正、リ、来、リ、ト、シ、

幸、川村、参議、自ら、参議、ヲ、降、テ、為、海軍、卿、

此時、榎本海軍卿、罷、シ、佛國、全權、公使、多、ク、元、老、議、

官、を、兼、ル、命、キ、榎本、之、を、辭、シ、ト、拜、セ、

その後、大山、曰、榎本、之、を、辭、シ、ト、佛、公、使、ト、シ、拒、ビ、榎本、

佛人、之、不、悦、ト、シ、榎本、佛、公、使、ト、シ、

河野文部卿轉一為農商務卿

品川內務少輔轉為農商務少輔

按此時河野氏文部省中之轉合不宜省中之監定大抵教育上之人

元光院轉一為地方層議局議長

議長一伊藤山崎直胤一此議長為伊藤

新御者政府之新御者

之權一此等之伊藤井上之策

曾為河野之司法大判官

為井上之運動也一仍為井上之方便也設河野之著顧一此農商務之設也內務省之分割也一議論為起一伊藤內務省中之轉一大久保の跡一引受一此後一地方之體面見在也一內務中之裁分一權之減削也一此後一及地方之體面也一實大隈の語り合一也一時機熟也一也一引其也一也一片面河野之文部省中不持合機也

限大隈俄に新省に起し河野を推挙せんとも
岩倉と謀り土佐人と引起し岩倉も其機
之を蒙り岩崎の依倚有り昨年大隈の外債編
成野に任滿海軍にあり到底薩長人中心不
成大隈と海軍が折衝大隈以上は山崎の運
轉に當り薩長五代長流の滋澤を推し計り
漸く土佐人の志を概観せしむる策あり其旨は
河野と農商務卿とあり其機決し大隈大
隈と河野の通謀ありと云ふ

福園議官轉為文部卿

以て竹田孫長崎と云ふ山崎況に始末を行テ一切
岩崎の荷を自ら負進み此因縁より以後孫を
脱却せしめ大隈に連動あり此土佐人大に
起頭あり
去方管内の輔捕と知内務大輔 知方より行 以て
右擧げ府に奉り此時内務省に大か農商務
の移りて減教に方振立す目下知方は内務省に在
柳川正尉より土佐と云ふ土佐人七割御見せし

又宮内へ陽上方を致し陽下之願年とて市中
へ馳参りし事あり説き宮内徳大寺の陽倉に於
一人も参りし方針あり

揚本進、海軍中納言の旨、氣宮内省御用掛一等
官の旨、年俸四千圓の賜、宮中御造候と知せり。
以後長州の幕人と海軍の出入り伊弉世報
せらる揚本に到りし事あり

井戸島揚本、伊弉世と面下長は揚本、伊弉世と
地方へ逃避し伊弉世、策を授けて揚本を引き
たり

由緒あり

川村秀議と止むるも海軍卿のせむ成り

右川村秀議兼任の思ひ、資料の海軍
卿の歳りし、余程岩倉と長人の弾力あり

川村始めの事、理の揚本と退け山田、義も揚本

廿一、山田却の事、外へ岩倉と面すが、揚川
九府より山田に進むしと事、切と不承りあり

可、*當り川村の評、私あり*

山田相宮内少輔

第十二年

國會開設、勅諭明治二十三年三月、議員ヲ召シ國會
ヲ開キ朕ノ初志ヲ成ラシムルニ
此日大隈英議ヲ罷シ能ハル莫クハ此年選舉ノ日也

辛酉

任參議大藏卿

松方正義

任參議兼參事院議長

伊藤博文

任參議陸軍大臣

大山巖

任參議文部卿

福國孝悌

任參議工部卿

任參議院副議長木高行

任參議外務卿

井上馨

任參議開拓長官

黒田清隆

任參議

山縣友朋

任參議農商務卿

西郷從道

任參議內務卿

山田顯義

任參議司法卿

大木喬任

任參議海軍卿

川村純義

右改正、為、十二參議

七年七月二十九日

七年八月二日

七年八月二日

七年八月二日

七年九月十日

七年五月二十四日

大隈重信通

農商務卿
河野敏鎌通

佐野大藏卿元老院副議長

田中副首相兼参事院副議長

山田大藏卿兼参事院副議長

右此列以外三人(伊藤、野田、松本)

十葦

三月 伊藤参議为憲法取調被命歐洲行

十葦出帆

隨行員

伊藤已代治

三好退花

河島醇

平田東助

吉田正春

三十五年一月廿日及

十七年

勝安芳より西御虎太郎に贈る書翰

貴兄の良しと願末の書

御上之書見ると去年の如く内之なる事、之節
石家易之、則ち身何れに在る、出づる、出づ
る、再遊洋學の事、上海外に出づる、後、
可然、順序之、如く、貴兄の事、市手許、
學費、其の、政官、子、往、常、
出七、大、勤、思、言、中、生、
聖恩、心、在、思、事、如、世、安、
此、書、也、

此便行至此處其地甚遠境多被此評
說七生易事火心拙存事物之理

於此也

十七年

勝安芳

西原實大印

十七年

今日楊惺者理歸裝葭葭橫濱因鹿門
為清國之遊同船解纜仍同重野巖谷小牧
浦生諸君到橫濱送別詢不勝眷之明日有
太平海郵船又發港單作才書呈上以慰遠
即頌文祺不荏之諒黃公度道憲先生

十七年吉身伯為日本鐵道會社長時

八月廿日前橋鐵道開業之式以荊書及阿
香阿德二女携之上野乘浪車其前
橋達之二十三日伊香保有新聞佛船數艘

福州馬尾之造船局、砲擊清艦數艘、砲
擊破碑、廿廿昔夜香山、大風雨、高島嘉吉
東話易學及知年艱難、德曆、談、別、錫、
二十七日大久保利和司道、歸京、極、道、妻、見、左
香山

十二月一日

宮内出勤 杉、皇君建築拜見、約、延、引
吉井ヲ訪木挽所、坊、浴、内、途、洋、食、新、番、座、
行、佛、清、事、件、佛、回、議、院、論、軍、費、支、出、方、策、

二日

美晴無風、恰、春色、宮内省、不、参、吉井、稅、所、
本、田、申、合、木、下、川、到、留、魂、碑、拜、海、舟、
公、前、碑、下、玉、忠、又、一、碑、建、碑、石、運、送、當、
日、不、思、儀、天、候、ア、リ、記、此、夜、三、島、通、庸、
招、飲、吉、井、稅、所、同、行、新、橋、藝、妓、小、小、花、來、

右杯金杉橋側火事アリ三島三層樓より眺望
三島、樓、故山形水野洲老建築、四圍所、有石
物、

三日并晴

即依本悔行、香山暮地行、
宮内省出立

十七年十二月二十日

参事院出勤財務部一同出揃穴戸磯島
惟精渡正元岩崎小次郎男谷忠友小池靖一
浦生山及我々
近多斎美彦、家會吉井吉向、佐成、近原兼
伊藤、何出、三代治、托手、福園、初氣、松方、兼
者信、無記

二日、日曜

朝吉井、行々、西御菊、之、白杉、白、杉、道
昨年七月、次々、宗津宮、鉄道、成、言、不

栗橋長十四百間價拾八萬圓 信川川底
着石あり

午後小森河行

比添歌碑一件井上外務省訪上高島勅命
事務省、中横濱出帆樺山管紀日記
上陸路沿路沿河行

新橋比比多川船下保親美、會中

二十一日 午前 中地知長

養事院出勤 定議官 借出園支即料理
三浦、彦市、器、梅田、高、高、赤坂、浦所

内之者、火、身、火、庫、火、掛、火、等
と言ふ、火、言、法、火、抄、下、言、見、舞

二十日

長事院議及補拜命、身、築地、妻、夏、屋
火、言、同、安、相、佐、人、言

伊知夫、瀬、兼、富、山、仰、松、方、左、藏、印

吉田、外、務、卿、代、理、吉、井、宮、内、大、輔

伊東、大、政、官、大、書、記、官、已、代、理

上、原、(、瀬、海、来、歌、者

阿、波、小、花、阿、比、南、村、阿、蘇、兵

小笠原大老小妻

一金八十二圓

泡者科 祝分一武

二十也。

天氣好北海道水産物、有税品と定む
し、議中、多元老院多議、内閣事務員
完、議官男安、議官補大花有、有、社議官
補、目、切、多、經、た、出、流
議長、多、世、古、江、官、者、山、

庚子一月廿五日 既濟

板垣氏叙爵之顛末

南九馬所旅人宿金虎館、此、板垣氏
滞、海、身、存、人、の、ま、た、殿、爵、也、話、と、云、波、其
在、儀、也、世、上、の、問、題、と、云、成、る、因、白、仍、一、日
板、垣、と、お、尋、面、會、時、一、轉、年、と、有、者、何、上、價
何、と、云、板、垣、氏、片、の、辭、爵、と、喜、心、多、也、陳
也、也、し、と、初、里、留、内、閣、部、の、事、初、者、也、
閣、部、を、委、托、改、々、得、共、自、分、の、權、内、を、た、り
公、取、是、を、い、論、身、公、任、の、持、出、以、外、者、と、有、
散、与、の、事、少、く、三、條、内、大、臣、又、は、信、未、論、圖、也、

官中顧問の年々國旗を掲げし終るまで
内閣官の年々馬車に乗せしめし其
論は平素の年々平民平均の朝令を確守
し全体を州士族の教養の階級を中
平均論を案易ありしよ當時の木戸長瀬
の人民平均の川崎の解除を意見
難固を案堂の文説の遊子平民平均を成
華七族平民婚姻の許可を成安片
又華族を抽る五苦の世爵を成安片
久の階級を奪却の人智を成傳

考

此成を施方する由も先一先法を給て成
多中の中より予の平生の舊道と以て之を
論し勸告を給て之を及に勸告の政事
上の關係せしもの事もあるに維新の功勳
を賞せしむる由も列華族の授賞を
家と勸告せしむる由も授賞の勳命を
授賞の勳命を授賞の勳命を授賞の勳命を
第一の勳命を授賞の勳命を授賞の勳命を
授賞の勳命を授賞の勳命を授賞の勳命を
授賞の勳命を授賞の勳命を授賞の勳命を

九日伊藤証理より為り物成内魚子あり
は節板垣校存より法一采吉井中間
より周禮内ありおめを法況を視察
せんおめありたり吉井より証理の書物も
内示せし周禮の坊より法一采吉井も物
板垣を論しは為り校存也

陛下十分の恩恵あり物成に不始論の
より首上人臣より感心戴拜ありたり
御板垣教目法より無く法よりも
中より心より喜しく誠にも志ありと横言あり

校存の特典あり之を辭却きや
事より倫より然と不し為り
大臣之意より但し具然也

糖飯

二十一年河内保清を搦りて 井上朝房討死す
 其時井上伯曰く 忠臣 忠臣は 有徳 有徳の 具 具
 多し若し忠臣身 に 身に 徳 徳を 口 口に 口 口
 悪食を食し も も 味 味 も も 学 学 也 也 夫 夫 と と
 後打死す を を 以 以 て て 忠 忠 臣 臣 と と 稱 稱 す す 忠 忠 臣 臣
 異 多 多 大 大 房 房 為 為 堂 堂 の の 美 美 衣 衣 美 美 食 食 也 也 其 其 人 人
 人 も も 不 不 自 自 由 由 也 也 是 是 君 君 の の 供 供 給 給 也 也 其 其 人 人
 人 は は 忠 忠 臣 臣 を を 報 報 して て 忠 忠 臣 臣 は は 忠 忠 臣 臣 を を 報 報 して て 忠 忠 臣 臣
 忠 臣 臣 は は 忠 忠 臣 臣 を を 報 報 して て 忠 忠 臣 臣 は は 忠 忠 臣 臣
 臣 節 節 を を 守 守 り り て て 忠 忠 臣 臣 は は 忠 忠 臣 臣 は は 忠 忠 臣 臣
 臣 節 節 を を 守 守 り り て て 忠 忠 臣 臣 は は 忠 忠 臣 臣 は は 忠 忠 臣 臣

[Blank lined area for writing]

御官非職に早く三年の世とす
曾る九院の存り賢而白皇由無
玉跡を其の古毒付の跡もあはし
之の首と也但せまけの事あり
の儀を為す所は皇の御事花
子も遷りては出来ぬ所を
御祭毎二十一年未年拜と
し子當年の風雨不天の氣あり
とる御用する非職の者分
世と御事とす

お上りたす月とす言も回りの事一ひたす

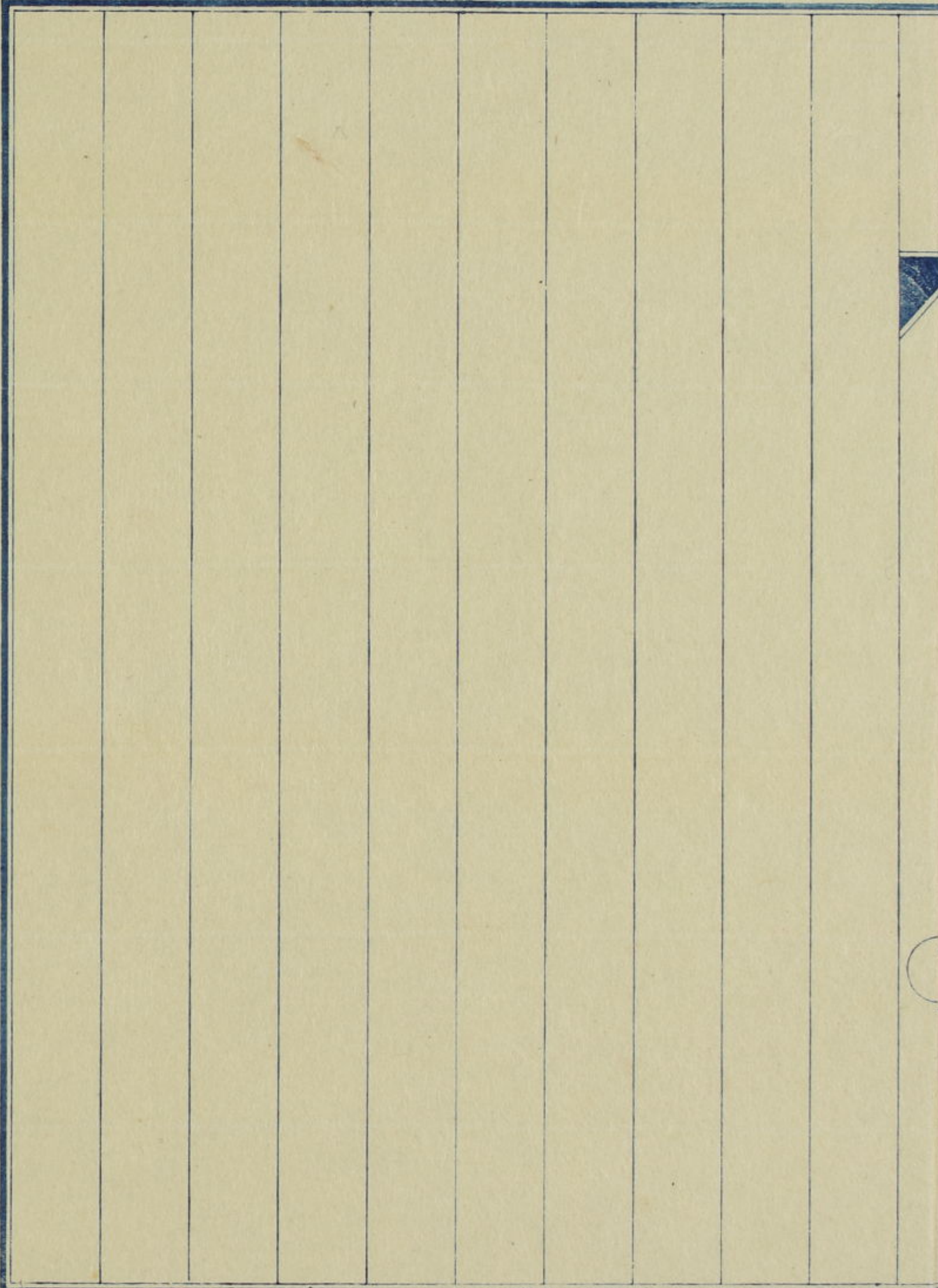
明治二十五年

四月二十七日

華族局と爵位局と改称し書類並吉井造
 若中身五辻と書類並吉井造
 心より川と書類並吉井造
 子所と書類並吉井造

五月十者

五辻と德大寺長官の御名類並吉井造
 尋へて長官長官大臣より考へて書類並吉井造



爵位改稱目

一記

爵位七重一即ち華族之姓を以てし
 官年之改稱之實態式部之下あり
 昨年華族句と云ふ位階を定む命し
 吉井次官箱根留り故自分より書通せし事
 あり故に改稱一系吉井熱河行あり
 已に此事ハ伊賀信理之任書中よりあり
 之の改官の内活せし吉井安心と云ふ事
 其事一日内活せし事と云ふ事

爵位局改稱目

爵位局之厚考亦淺し
 其方大臣并攝井之任在り
 老兄亦其方之威ハ伊賀信理之任在り
 曰君も其方の一考あり
 之等百如し無事
 隙あり
 兄之任改稱
 下等
 之進退

陸奥藩外に升る者定む何れも清高なるを
也以て洋を

六月十四日

減下

五过先甚也

故に與る経書に於て其の功績を以て官位を改
稱し其の功に於て官職を授けし由は其の功績を以て
稱し初但し初叙に於て其の功績を以て叙せしむ
傍議に於て

年

華族地方の地位許可の理由

一 中央の財を散りて地方に殖業を興起す

なり

一 華族の家産を以て華園とす

而して其の地を確定すなり

此等上列の各事は家米俸の移住に由りて
多額を有る見ゆべしなり

廿四年五月十日 一紙下

田中秘史官の内報

吉井担官熱海行之際三條公之命を
上杉老公殿位之旨に如月之厨に長江に書
井高内之旨に如月内古匠之旨に細話し置行大
臣曰く特別之旨に如月内古匠之旨に細話し置行大
一所に調査せしむべし

如き上杉老公之旨に如月内古匠之旨に細話し置行大

十曾田中内報

二十五年

大坂
伊加坂長

二十六年

大坂
河野長

二十七年

伊加坂長

二十八年

大坂
河野長

二十九年

伊加坂長

三十年

大坂
河野長

支那

二十一年

伊加坂長

二十二年

伊加坂長

二十三年

伊加坂長

二十四年

伊加坂長

伊加坂長

欽定憲法

二十五年

伊加坂長

二十六年

伊加坂長

二十七年

伊加坂長

二十八年

伊加坂長

二十九年

伊加坂長

三十年

伊加坂長

三十二年

伊加坂長

三十三年

伊加坂長

三十四年

伊加坂長

金貨本位成

三十二年 伊坂出伊坂退 大隈出大隈退
 大隈出 伊坂出 伊坂退 大隈出 大隈退
 憲政黨
 縣出 務件 大坂 大隈 伊坂 伊坂
 支那 總行 伊坂 大隈 伊坂 伊坂
 伊坂 伊坂 伊坂 伊坂 伊坂 伊坂
 三十二年
 山縣 滿島 伊坂 伊坂 伊坂 伊坂
 地租 伊坂 伊坂 伊坂 伊坂 伊坂

龍泉堂

廿年 四月廿日	任內閣總理大臣	黑田清隆	
廿年 十月廿日	依願免內閣總理大臣	黑田清隆	任內閣總理大臣
同年 同日	任內閣總理大臣	三條實美	
同年 十二月廿日	任內閣總理大臣	山縣有朋	
廿年 九月廿七日	專任總理大臣	山縣有朋	
內閣大臣			
內務大臣 西鄉從道	海軍大臣 樺山資能	陸軍大臣 大山巖	農商務大臣 陸奥宗光
外務大臣 青木周藏	文部大臣 芳澤謙正	逓信大臣 藤野野矢	司法大臣 山田顯正

二十四年

知便教を討つ土月吉指抄

松方、経理大
臣、時事、
六月廿八日

井上伊藤両伯、参内。是日、朝野新聞、白く、「昨日九日在野大政黨の両首領早稲田、國會にて天下の視線を一身に集中し、其際黑幕宰相の一人たる井上伯車を驅ら免多甲。昨日十日、又伊藤伯参内、是、何ぞ徴を大隈の辭表。一昨、上、午後三時過ぎ、大木文部大臣、其節、首を承け、早稲田、大隈伯の印をとり、伯は面會して、天皇陛下の意思、に、辭表を呈出す、手紙を傳へ、大隈伯は、其方、承り、思召し、辭表を呈出す。一、是、實、恐れ入、り、次第、有、此、爲、初、極、山、頂

大隈相出願
回詳表

回の官任より、業命を賜ひし時、其の石具の身は
不職の業命に、これを困く之を辭し、其の
及び、其の業命に、其の業命に、其の業命に、
其の業命に、其の業命に、其の業命に、其の業命に、
其の業命に、其の業命に、其の業命に、其の業命に、
其の業命に、其の業命に、其の業命に、其の業命に、
其の業命に、其の業命に、其の業命に、其の業命に、
其の業命に、其の業命に、其の業命に、其の業命に、
其の業命に、其の業命に、其の業命に、其の業命に、
其の業命に、其の業命に、其の業命に、其の業命に、

伊藤道徳

に、其の業命に、其の業命に、其の業命に、其の業命に、
其の業命に、其の業命に、其の業命に、其の業命に、
其の業命に、其の業命に、其の業命に、其の業命に、
其の業命に、其の業命に、其の業命に、其の業命に、
其の業命に、其の業命に、其の業命に、其の業命に、
其の業命に、其の業命に、其の業命に、其の業命に、
其の業命に、其の業命に、其の業命に、其の業命に、
其の業命に、其の業命に、其の業命に、其の業命に、
其の業命に、其の業命に、其の業命に、其の業命に、

日四廿	日六十	日八	六 月	日四廿	日六十	日八	五 月
日五廿	日七十	日九	日一	日五廿	日七十	日九	日一
日六廿	日八十	日十	日二	日六廿	日八十	日十	日二
日七廿	日九十	日十一	日三	日七廿	日九十	日十一	日三
日八廿	日廿	日三十	日四	日八廿	日廿	日三十	日四
日九廿	日一廿	日三十	日五	日九廿	日一廿	日三十	日五
日卅	日二廿	日四十	日六	日卅	日二廿	日四十	日六
日一卅	日三廿	日五十	日七	日一卅	日三廿	日五十	日七

利島
高野
太良

日四廿	日六十	日八	四 月	日四廿	日六十	日八	三 月
日五廿	日七十	日九	日一	日五廿	日七十	日九	日一
日六廿	日八十	日十	日二	日六廿	日八十	日十	日二
日七廿	日九十	日十一	日三	日七廿	日九十	日十一	日三
日八廿	日廿	日二十	日四	日八廿	日廿	日二十	日四
日九廿	日一廿	日三十	日五	日九廿	日一廿	日三十	日五
日卅	日二廿	日四十	日六	日卅	日二廿	日四十	日六
日一卅	日三廿	日五十	日七	日一卅	日三廿	日五十	日七

日四廿	日六十	日八	月
日五廿	日七十	日九	
日六廿	日八十	日十	日二
日七廿	日九十	日十一	日三
日八廿	日廿	日二十	日四
日九廿	日一廿	日三十	日五
日卅	日二廿	日四十	日六
日一卅	日三廿	日五十	日七

日四廿	日六十	日八	八月	日四廿	日六十	日八	七月
日五廿	日七十	日九		日一	日五廿	日七十	
日六廿	日八十	日十	日二	日六廿	日八十	日十	日二
日七廿	日九十	日十一	日三	日七廿	日九十	日十一	日三
日八廿	日廿	日二十	日四	日八廿	日廿	日二十	日四
日九廿	日一廿	日三十	日五	日九廿	日一廿	日三十	日五
日卅	日二廿	日四十	日六	日卅	日二廿	日四十	日六
日一卅	日三廿	日五十	日七	日一卅	日三廿	日五十	日七

松芳
總理
大臣
辭職

伊藤
再任
總理
大臣

議院
閉會

伯山田頭義北

二十五斗

三月				土月			
日四廿	日六十	日八	日一	日四廿	日六十	日八	日一
伊達宗成葬			伊藤宗成葬	可視酒造行		伊藤宗成葬	植本名云
日五廿	日七十	日九	日二	日五廿	日七十	日九	日二
伊達宗成葬			伊藤宗成葬	伊藤宗成葬			植本名云
日六廿	日八十	日十	日三	日六廿	日八十	日十	日三
							天長寺
日七廿	日九十	日十一	日四	日七廿	日九十	日十一	日四
日八廿	日廿	日二十	日五	日八廿	日廿	日二十	日五
日九廿	日一廿	日三十	日六	日九廿	日一廿	日三十	日六
日十廿	日二廿	日四十	日七	日十廿	日二廿	日四十	日七
日十一廿	日三廿	日五十	日八	日十一廿	日三廿	日五十	日八

伊達宗成北

二十五斗

明治二十五年

二月				一月			
日四廿	日六十	日八	日一	日四廿	日六十	日八	日一
伊藤宗成葬		勝小鹿北					朝拜
日五廿	日七十	日九	日二	日五廿	日七十	日九	日二
大山伯来		山尾喜安					晴
日六廿	日八十	日十	日三	日六廿	日八十	日十	日三
日七廿	日九十	日十一	日四	日七廿	日九十	日十一	日四
日八廿	日廿	日二十	日五	日八廿	日廿	日二十	日五
日九廿	日一廿	日三十	日六	日九廿	日一廿	日三十	日六
日十廿	日二廿	日四十	日七	日十廿	日二廿	日四十	日七
日十一廿	日三廿	日五十	日八	日十一廿	日三廿	日五十	日八

明治廿二年

陸奥府免卷南宮
任在密使向官
河野敏謙任農商務大臣
東之世任在密使向官
春原任在密使向官
大山將軍到島内務大臣
任評三白三ヶ月
六ヶ月

三月		
日八	日六	日四
日一	日九	日七
日二	日十	日八
日三	日十一	日九
日四	日十二	日十
日五	日十三	日十一
日六	日十四	日十二
日七	日十五	日十三
日八	日十六	日十四
日九	日十七	日十五
日十	日十八	日十六
日十一	日十九	日十七
日十二	日二十	日十八
日十三	日二十一	日十九
日十四	日二十二	日二十
日十五	日二十三	日二十一
日十六	日二十四	日二十二
日十七	日二十五	日二十三
日十八	日二十六	日二十四
日十九	日二十七	日二十五
日二十	日二十八	日二十六
日二十一	日二十九	日二十七
日二十二	日三十	日二十八
日二十三	日三十一	日二十九

四月

四月		
日八	日六	日四
日一	日九	日七
日二	日十	日八
日三	日十一	日九
日四	日十二	日十
日五	日十三	日十一
日六	日十四	日十二
日七	日十五	日十三
日八	日十六	日十四
日九	日十七	日十五
日十	日十八	日十六
日十一	日十九	日十七
日十二	日二十	日十八
日十三	日二十一	日十九
日十四	日二十二	日二十
日十五	日二十三	日二十一
日十六	日二十四	日二十二
日十七	日二十五	日二十三
日十八	日二十六	日二十四
日十九	日二十七	日二十五
日二十	日二十八	日二十六
日二十一	日二十九	日二十七
日二十二	日三十	日二十八
日二十三	日三十一	日二十九

五月

五月		
日八	日六	日四
日一	日九	日七
日二	日十	日八
日三	日十一	日九
日四	日十二	日十
日五	日十三	日十一
日六	日十四	日十二
日七	日十五	日十三
日八	日十六	日十四
日九	日十七	日十五
日十	日十八	日十六
日十一	日十九	日十七
日十二	日二十	日十八
日十三	日二十一	日十九
日十四	日二十二	日二十
日十五	日二十三	日二十一
日十六	日二十四	日二十二
日十七	日二十五	日二十三
日十八	日二十六	日二十四
日十九	日二十七	日二十五
日二十	日二十八	日二十六
日二十一	日二十九	日二十七
日二十二	日三十	日二十八
日二十三	日三十一	日二十九

六月

六月		
日八	日六	日四
日一	日九	日七
日二	日十	日八
日三	日十一	日九
日四	日十二	日十
日五	日十三	日十一
日六	日十四	日十二
日七	日十五	日十三
日八	日十六	日十四
日九	日十七	日十五
日十	日十八	日十六
日十一	日十九	日十七
日十二	日二十	日十八
日十三	日二十一	日十九
日十四	日二十二	日二十
日十五	日二十三	日二十一
日十六	日二十四	日二十二
日十七	日二十五	日二十三
日十八	日二十六	日二十四
日十九	日二十七	日二十五
日二十	日二十八	日二十六
日二十一	日二十九	日二十七
日二十二	日三十	日二十八
日二十三	日三十一	日二十九

品川内務大臣運本
干淡中道ヒキ
副島其後承二
二十日ニシテ罷
大山言的中
村園康毅反并長
懲戒裁判所請求
三遠慮引

十廿夜
九免宅、伊藤相万集
會

其日知事

林津恩、西名通

此士新改進意、田早苗

大八里、一

此承、不
此承、不
此承、不

此承、不
此承、不
此承、不

此承、不
此承、不
此承、不

此承、不
此承、不
此承、不

此承、不
此承、不
此承、不

此承、不
此承、不
此承、不

此承、不
此承、不
此承、不

此承、不
此承、不
此承、不

此承、不
此承、不
此承、不

此承、不
此承、不
此承、不

此承、不
此承、不
此承、不

此承、不
此承、不
此承、不

此承、不
此承、不
此承、不

此承、不
此承、不
此承、不

此承、不
此承、不
此承、不

此承、不
此承、不
此承、不

此承、不
此承、不
此承、不

此承、不
此承、不
此承、不

此承、不
此承、不
此承、不

梅子生

明治廿五年

八月				七月			
日四廿	日六十	日八	日一	日四廿	日六十	日八	日一
			日一				日一
			日二				日二
			日三				日三
			日四				日四
			日五				日五
			日六				日六
			日七				日七

伊香保行
 大八、勝、黒田、早朝、礼、大末
 河野、住、内、所、大、臣、依、野、傳、書、前、原、大、臣
 梅子生再三辭表
 伊香保、表、黒田、早朝、禮、大末、河野、住、内、所、大、臣、依、野、傳、書、前、原、大、臣

九月				十月			
日四廿	日六十	日八	日一	日四廿	日六十	日八	日一
			日一				日一
			日二				日二
			日三				日三
			日四				日四
			日五				日五
			日六				日六
			日七				日七

大八、白、岩、井、行
 伊香保行

明治廿五年

十月				十一月			
日四廿	日六十	日八	日一	日四廿	日六十	日八	日一
日五廿	日七十	日九	日二	日五廿	日七十	日九	日二
日六廿	日八十	日十	日三	日六廿	日八十	日十	日三
日七廿	日九十	日十一	日四	日七廿	日九十	日十一	日四
日八廿	日廿	日二十	日五	日八廿	日廿	日二十	日五
日九廿	日一廿	日三十	日六	日九廿	日一廿	日三十	日六
日十	日二廿	日四十	日七	日十	日二廿	日四十	日七
日一廿	日三廿	日五十		日一廿	日三廿	日五十	

憲法之部

七年伊地知三治之建言	根元立法
十年伊藤洋行、節	七律之詔、一不許自定、二不裁
十六年伊藤、賜、	人之選、憲法之漸、此、
十九年伊地知、日、井、上、毅、伊地知、之、帝、之、意、也、	井上、三、
二十五年憲法公布	伊藤憲法、
二十五年三條義典、	死去、君、側、
二十五年賜伊藤、	衣、
二十六年	伊藤、再、為、總理、事、

壬午

壬午 三月十七日 子部大臣井上毅ノリヒコ 北

壬午 九月 伊藤新成

壬午

壬午 六月 伊藤新成

〇〇〇〇〇〇〇〇
憲法義解、五古之

大隈 出正月正

山縣 水谷 謹

壬午

壬午

六月 五月 四月 三月 二月 一月 七月 八月 九月 十月 十一月 十二月

廿七年六月 言 晴伯同行 日光 奉拜 経費

五十鈔 音程花 二十鈔 齋藤 十鈔 車又 十鈔 大宮 解

五十鈔 赤松堂 神饌料 二十鈔 大猷院 身火料

十鈔 経法利料

二十鈔 三ヶ木 齋 寺田 日光 奉書 二十鈔 康子

二十鈔 日光 佛圖 二十鈔 日光 山落

廿七 内んぶ 五鈔 干

十鈔 車又

廿七 奉書 四十鈔

日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月

廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月
廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月
廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月
廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月
廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月
廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月
廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月
廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月	廿八年三月

廿八年三月干涉之

攝和談成李鴻章辭馬關

露獨佛三國公使我外務省來志者還自遼東

伊藤自廣島舞子來陪奧別於會

松方野村自京都舞子會野村真馬關行

山縣字品出帆旅順小松宮大山於謀

天皇自廣島京都遷幸山縣天皇御景博覽會於岸引

天皇御不例三國同盟此事實始着也今快

八 日	七 日	六 日	五 日	四 日	三 日	二 日	一 日	五 日	四 日
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
			内閣樞密院會子京初大本營思田	与黒田觀邊并戸孫元瑞來三田訂約京都行					
			誠市京都行						
			朝七時達京都						

旅員會議 小松宮 大山野津 津佐為山縣來三國之議

三 月	二 月	一 月	二 月	三 月	四 月
於京					
三月					
坂本道司 杉方 辭職 初度ノ時	西郷 決断 大久保 討志	杉方 辭職 群小松宮 七比	杉方 及後 志次 野一	西郷 志次 野一 野一	湯沢 志次 野一 野一
於京					

於京 三月 坂本道司 杉方 辭職 初度ノ時 野一ノサセタカヨカタ 杉方ノ人

西郷 決断 大久保 討志

杉方 辭職 群小松宮 七比

杉方 及後 志次 野一

西郷 志次 野一

湯沢 志次 野一

新公 省非 職人 及 以 治 七年 初 收 三 寧 以 編 卷 本

庚年何日

男子

蘇族 叙切 叙動 年定 乞時定

男子

西位 隨一 隨一

伊得 切三級 習美 七百日

里末 日 日 七百日

同仔 切三級 習美 七百日 一兩十日

奧 切三級 習美 七百日

批 日 日 七百日

大寺孤	立尼	川口	大道	大島	大島	大島	坪井	星岡
	切三郎							
	旭日中流	奥三郎				旭日中流	旭日中流	
	七百目	六百目	七百目	七百目	七百目	七百目	七百目	七百目

石屋	小川	花水	山口	見玉	西交	伊集	乃木	老平川
	切三郎				切三郎	五一		切三郎
	旭日中流	旭日中流	旭日中流		旭日中流	切三郎		旭日中流
	七百目	七百目	七百目		七百目	七百目	七百目	七百目

星田
相承子

二十九年

伊藤内閣ノ末 坂本内閣ノ始

二十九年
四月十日

任内務大臣 板垣退助

五月廿日

免外務大臣 陸奥宗光

六月二日

任樞密顧問 樺山資紀

六月十日

任臺灣總督 桂 太郎

六月十五日

三陸海嘯

八月廿日

仍願免總理大臣 伊藤博文

任總理大臣

任總理大臣 黑田清隆

伊藤内閣
尾解原

御幸
七考觀

九月十七日

向島大水六木堤破壊

〇 十八日

任總理大臣 松方正義

〇 十九日

任内務大臣 樺山資紀

〇 九月二十七日

李鴻章辭 橫濱

〇 十月二日

黒田伯慶腦充血症

〇 十月十日

勝河劭助和名内閣 諺々

〇 十月廿三日

徳女嫁于山下家

〇 十月十四日

二十六世記新聞 終

宮内大臣土方久元
内務大臣樺山資紀
内閣書記長 関根勤

十月廿六日

英公使サトウ 扇田美

〇 廿八日

山下源太郎 英國行出立

〇 十一月十三日

磯邊 温泉行

〇 十二月九日

樺山内相官定 茶話會

山形松方大臣 櫻井 推挙

小沢徳次郎 櫻井 推挙

山形松方大臣

二十九年十月七日大山山吉山
 卸訪昨日沼津より
 ○伊知係大磯より沼津へ
 上系此中伊知を存り
 ○伊知の片を補給、備才
 世人の之りハ方美人ト又易
 夫知也、
 ○愛、補成、モリヤリ
 ○今、内閣、何事、松方
 山西卿、誰と法津、知
 高島、業、朝暮、
 態、唯、大隈、不、
 此、人、相、坊、
 口、大、木、方、部、
 道、信、
 本、乳、泉、
 出、逆、信、
 野、村、

気の東ヨル、丹、松方、放
 任、
 後、
 激、
 寧、
 初、
 勝、
 新、
 又、
 的、
 書、
 去、
 何、

防細川宅河原井初静

古藤日記

岩丸日記

有松川親王御行。吉木子存
 伊藤信長。是秋

神橋。4/11

伊藤信長

日月	日月	日月	日月	日月	日月	日月	日月	日月	日月	
							尾崎三良	如房義順	園田實	長杉洋
								三浦一安	羽島種直	丸復隆一

三十年

十月 松方首相官舎、榊山内相高島西郷大隈と相會し増税
十三 問題決議、相成、高島、西郷、如此結果、相成、榊山内相
 家、為ノ悲悦、榊山内相、悦、榊山内相、次、榊山内相、
 榊山内相、如此結果、大坂築港式、出、榊山内相、
 志、大山、昨年、退職、以来、伊藤、西郷、不、逢、然、此、夕、西郷、園
 有、榊山内相、下、リ、別、當、此、法、政、談、榊山内相、及、榊山内相、
 榊山内相、榊山内相、榊山内相、榊山内相、榊山内相、
 伊藤、山縣、松方、大隈、西郷

相客ヲ伊藤ニモ初メテ面會セリ大山ヨリ大隈、直義等ヨリ故
 事ハ議會ヲ通過シ豫備昇ク、成立スルハ支レテヨリ心算ラ
 年中議員ノ縱操、取り掛リ形モ見苦レ全體ノ大局ヲ
 見テ方針ヲ定メトシ、断行 解散シテラ支レテ行キ詰ラ
 ラ人ニ譲リ、最少シク男ヲシクヤリ方モノアヤク高島トシテ年
 中議場ノ組織、日ソノ送ルモノ、此ニシテ大山ヨリ
 大山ヨリ警視總監ヨリ樺山ニ電報シテ改進黨中 論議沸騰
 不測有ク早急送物京致ス可シトノ報接シテ
 十九日樺山歸京

甘樺山首相官舎ヲ始テ大隈、面會其時大隈黨類子分
 五箇條ノ問題ヲ申シ出テタリトテ懷中ヨリ書付テ出セリ若シ粗
 增加ニ償金ヲ遣リ繰ルヘシト

昔其夜首相宅ニ例ノ大臣打寄、約束、處其夜大隈風
 邪ヲ外出難相成外務官舎ハ急ニ後様申シ来リ高島
 ハ別用アリ不系松方首相西卿樺山ニテ訂シ後處大隈
 増税ハ不人氣ヲ政界上ニシテ施行スルニ能ハザルノ意見見シテ
 俄、前論及反復セリ

米三十七年来三千萬石出来ノ處本年ノ諸縣洪水

コハ四萬石不足也 價格ハ九千萬圓ノ地租増加
ルモ人民生活上無差支トハ是非執行可致議決ス

其楠木氏相方有相ハ余ハ秘密ニ德義上ヲ以テ其條忠告

ス然レ一方ニ於テハ新聞ニ公ニシテ大隈實ニ其

ノ為ニ悔ミテ可後ソウリト樺山ハ云

樺山曰ク自今交渉委員ノ心ヲ付テ改進自由ヲ實ニ其

政府同情ノ議負ハ談話ニ實ニ不ハ分事ニテ大困難

セリ其改進黨中ノ人物ノ少キ度是ノ狹隘ノ事ヲ議

クヘキナリ實ニ大隈モ可後ソウリト樺山ハ云

其場合ニ来セリ大山大隈後ノ内閣ヲ心配スル今日
有相ハ決心ニ断然若クナリ

青三日

大山曰ク大隈ハ明後日ノ宴會ヲテ辭表スルニ此度大隈

辭表ニニ枚舌ヲ使フニ價直ニ下ルニ但シ大隈辭職

セバ前途内閣ノ維持シ難シ初メ大隈總理大臣トシテ様

ノ組織ヲ為スヘリ最近ニテ永持テ改選ノ方針アルヘキニ何向テ大

隈ハ高島ノ藩者ニ從テ出身スルニ始終ニ如キ改選ニテ

特色ヲ著セテ遂ニ今日ノ勢ニ到ルナリ

片目ノ窮境ニ始メ高野益矩飛賊スルヲ始ル

大山曰ク方今第一流ノ人物ハ伊藤井上山縣黒田西郷大隈ニ其他松方板垣品川著ハ身カ第二等ノ人ナリ

伊藤ハ慾モナシ偏頗モナシ古今東西著ク破ク非常ノ人物

長州第一等ノ人即チ天下第一等ノ人ナリ

井上ハ大膽雄武其所欲為必其結局ヲ為ス其有力

有為ハ其比ヲ見

山縣益殿ニ懐密必キ事ヲ疎略ス

黒田西郷誠力先見ナリ

大隈ハ才幹非常ナリ

松方ハ俗人ナリ況ヤ八十萬ノ財産ヲ増殖コト昇官ノ評ヲ

第一等事ヲ為ス人ヲ不知方針ヲ立ン不能

様ニ快隨ナリ

對外硬ノ和時ハ大隈在野時改進黨ニシテ政府ヲ攻

撃ス此方ヲ行セシナリ

後入齋ハ井上南畝ノ松方ニ諱名モナリ松方其名ヲ誰

タラズ知テ後入齋ハ誰ヲ指スマル見テ子圖ケリト

明治廿四年二月二十九日

<p>お方曰る大隈とて初澤と系に娘とを嫁す片名親函</p>	<p>お新の女お新の女康と名する其女がりしとよは物あり</p>	<p>大山曰くお方と名する自家貯蓄ありて深泊りし娘一疋</p>	<p>産く内こしへ外固難持たざる故に抱方ありよ感想あり</p>	<p>おりヨメお新お新と名する大和の娘とてしけお田舎物と名する</p>	<p>お片名親の御りお官と名する金と持たす其事候なりし</p>
-------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	-------------------------------------	---------------------------------

年月日	年月日	年月日	年月日	年月日	年月日	年月日	年月日	年月日	年月日
三月	三月	三月	三月	三月	三月	三月	三月	三月	三月
二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十
廿九	廿九	廿九	廿九	廿九	廿九	廿九	廿九	廿九	廿九
三月	三月	三月	三月	三月	三月	三月	三月	三月	三月
廿九	廿九	廿九	廿九	廿九	廿九	廿九	廿九	廿九	廿九
三月	三月	三月	三月	三月	三月	三月	三月	三月	三月
廿九	廿九	廿九	廿九	廿九	廿九	廿九	廿九	廿九	廿九

三十年

方總理大臣 辭表上進

議會解散 德大寺付位長田留之來り上意と傳ふ所

時已解散之派部 與あり書來

三月廿九日 拜謁。若や廿九日德大寺留田辭表上進 總理大臣後

神に會見上り 皇太后の御用へ 任選請願書 三月廿九日

三月廿九日 皇太后の御用へ 任選請願書 三月廿九日

三月廿九日 皇太后の御用へ 任選請願書 三月廿九日

三十年

招乙年
万億
膠州灣
強備
時

一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
伊藤侯爵任總理大臣	井上卿任大藏大臣										
西郷海軍卿任西の事務卿											
伊藤男爵任東の事務卿	桂子爵海軍大臣										
外山白一任文部大臣	金子男爵任日任事務										

三年一月十日

三年

三年一月十日... (Main handwritten text block with vertical columns of characters, including dates and names like '井上' and '伊藤')

● 法也... (Small notes or entries on the left side of the page)

大山九、漢津、均、素、子、云、不

持、守、自、法、多、使、少、年、之、是、能、自、上、年、內、給、各、業、一、後、已、書、之、日、後、也、
至、不、能、內、亂、可、起、之、子、孫、城、一、中、少、年、亦、好、也、子、孫、無、事、也、
亦、不、能、之、後、也、曰、矣、一、後、亦、好、也、中、少、年、亦、好、也、好、也、好、也、

伊豆内國一月十二日頃出立ノソコテ十日議官能登屋子ニ交致
テリト内國ニ東流ノ元老相繼々ト登屋ノ伊豆巨以傳末相屋子ト入
内ニ勝將一云ニテ白クテ夫イ豆方故中島ト傳言然物カト此
ト連報ト内流流伊豆相託トモト七知後

三十五年
一月末口上書ノ東テク此物トテ伊豆相傳ト傳言然物カト此
ト連報ト内流流伊豆相託トモト七知後

後金勢一儔至田三十九年播磨相限而

之ヲ第四回相立ノ為ニ五年九月ノ相限

其止數カニ延却ト云ハ於播磨相限ト六月

延却ト云ハ延却ト云ハ許成ト云ハ為年中中中

延見ト云ハ延見ト云ハノ事ト云ハ

相立ト云ハ延却ト云ハノ事ト云ハ
許成ト云ハ延却ト云ハノ事ト云ハ

與予如也姑息不惠也此七後也此南旅
 既言予中可新予之也此坊後我思
 膠州函承物可也此
 德人考考公人言
 德人二十八年馬國維和傅均定行
 德人自十七出之收提言此台海有如一地
 馬國維言一

明治三十五年十月十六

金銀指八箇

日月	日月	日月	日月	日月	日月	日月	日月	日月
		一 飾前	一 飾後	一 金銀	一 鐵屋和指付			
	八四張代至	則光	一 子字	真去				
		刀一振	刀一振	刀一振	刀一振			

本署白石法古武官新右衛門尉奉藏方大八人

日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月
								賈文、張五等		子賜等去遊愛宕下町等日一番地刀劍商	
								滿蒙堂		野瀨涉七等	

三三三

二月紀事

日	月	日	月	日	月	日	月	日	月
	八		七		六		五		四
	日		日		日		日		日
	考院 <small>沖繩事務所 學故振張忠厚</small>	考院 <small>明我新案 不卸身記</small>	考院 <small>此書新神城 昨晚今三夜</small>	昨 雨來	今 節 <small>節節 節節</small>	此 節 留 留 留 留			
	勝 粘 引 華 後 伯 等	國 債 外 國 著 集 著 作 權 可 受	午 後 清 願 會 採 擇 不 採 擇 詳 議	午 後 長 改 議 計 決 算 奴 店 長 覽 二 十 年 材 務 覽 式 紀 要	集 院 醫 師 法 否 決	レ フ 醫 師 會 電 報 不			
		勝 定 之 授 命 未	退 院 為 橋 園 內 上 海 代 理 人						
		九 時 次 可 三 印 內 宅							

舊正月
巳亥

二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月
							恭院 印紙稅 禁禁稅
							恭院 印紙稅 禁禁稅
							要害地 特別年限 地租徵集
							三十二年 夜男物宅
							清國 債之 自費

戊 亥

三月	四月	五月	六月	七月	八月
三月紀事 三十二年	貴族院 中布華族 令秘書局	出院 喇稅 法果	重三 子德 舞舞	大八 作 和立 習	午後 百花 園觀 梅
	在黒田 行和 作修 道	大八 習 行 竹 女 持 入 物	三條 宮 拜 訪 終 焉	山縣 方 道 治 里 内 令 娘 烟 香 白 溜 昂 三 年	山縣 方 道 治 里 内 令 娘 烟 香 白 溜 昂 三 年

山縣
方
道
治
里
内
令
娘
烟
香
白
溜
昂
三
年

日曜

九日	三 日	議院片即任辭正午由議院辭 午後去吉野邸
十日	十日	午前在出院院午後去吉野邸 午後在吉野邸
十一日	十一日	大隈方午後在出院院 午後去吉野邸
十二日	十二日	昨夜降雪 勝山稻忌 湖月梅景 淡齋 安場保和
十三日	十三日	少年樂隊 在銀館 雨 大八羽田行
十四日	十四日	在銀館 雨 大八羽田行
十五日	十五日	在銀館 雨 大八羽田行
十六日	十六日	在銀館 雨 大八羽田行
十七日	十七日	在銀館 雨 大八羽田行
十八日	十八日	在銀館 雨 大八羽田行
十九日	十九日	在銀館 雨 大八羽田行
二十日	二十日	在銀館 雨 大八羽田行
二十一日	二十一日	在銀館 雨 大八羽田行
二十二日	二十二日	在銀館 雨 大八羽田行
二十三日	二十三日	在銀館 雨 大八羽田行
二十四日	二十四日	在銀館 雨 大八羽田行
二十五日	二十五日	在銀館 雨 大八羽田行
二十六日	二十六日	在銀館 雨 大八羽田行
二十七日	二十七日	在銀館 雨 大八羽田行
二十八日	二十八日	在銀館 雨 大八羽田行
二十九日	二十九日	在銀館 雨 大八羽田行
三十日	三十日	在銀館 雨 大八羽田行

土

廿三日	廿三日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
廿四日	廿四日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
廿五日	廿五日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
廿六日	廿六日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
廿七日	廿七日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
廿八日	廿八日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
廿九日	廿九日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
三十日	三十日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
三十一日	三十一日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月一日	一月一日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月二日	一月二日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月三日	一月三日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月四日	一月四日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月五日	一月五日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月六日	一月六日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月七日	一月七日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月八日	一月八日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月九日	一月九日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月十日	一月十日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月十一日	一月十一日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月十二日	一月十二日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月十三日	一月十三日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月十四日	一月十四日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月十五日	一月十五日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月十六日	一月十六日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月十七日	一月十七日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月十八日	一月十八日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月十九日	一月十九日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月二十日	一月二十日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月二十一日	一月二十一日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月二十二日	一月二十二日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月二十三日	一月二十三日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月二十四日	一月二十四日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月二十五日	一月二十五日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月二十六日	一月二十六日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月二十七日	一月二十七日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月二十八日	一月二十八日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月二十九日	一月二十九日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月三十日	一月三十日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世
一月三十一日	一月三十一日	大八山行 增田親 近藤國光 課 西宮 三井 廣 世

三月	廿	廿一	廿二	廿三	廿四	廿五	廿六	廿七	廿八	廿九	三十																																															
日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月																																															
烈風不止天晴丸	我津村信源	川村醫	本夜	子テリヤ	廿一	早天靜	晴	終	丸	我	宿	庄	良	夜	廿二	好晴	天	氣	風	名	一	大	八	廿三	后	是	年	前	風	起	于	前	大	八	廿四	天	氣	一	一	廿五	黑	雨	仰	り	良	光	九	廿六	書	一	信	少	一	一	廿七	廿八	廿九	三十

四月紀事

四月	一	二	三	四	五	六	七
日	月	日	月	日	月	日	月
好晴	常	晴	理	美	滿	者	十
后	於	前	田	法	成	到	肩
下	八	望	多	今	夕	乃	不
旬	有	春	家	勸	進		
婦	南	園	德	岸	橋	浦	開
收	田	下	鮮	魚	尾	九	舞
舞	舞	舞	舞	舞	舞	舞	舞
神	武	帝	下	祭			
春	雨	如	霧	根	岸	表	具
山	上	野	山	一	區	橋	石
向	島	行	橋	花	浦	開	桂
晴	後	亮	後				
保	科	日	莊	正	春	下	悔
廿	廿	廿	廿	廿	廿	廿	廿

如所

晴晴晴晴晴

廿四日 廿五日 廿六日 廿七日 廿八日 廿九日 三十日

廿四日	廿五日	廿六日	廿七日	廿八日	廿九日	三十日
未明遊浪打針	雨三日茶糊之買	長以昇位正				
早田多養美料理狀立	晚天向長以之祝也					
藤架花弁	皇國之古事	古物訪美多				
葛瑞新花	若河名端	頭取西良中月能	由利公兵衛			
長政訪	川大將	日本	平川天神			
黒田園游會	徳女	高橋首	九鬼			

古物小半在礼行

朝十

廿七日

十七

大八活春 孝親里 年四 善光寺

廿四日 廿五日 廿六日 廿七日 廿八日 廿九日 三十日

廿四日	廿五日	廿六日	廿七日	廿八日	廿九日	三十日
所庭前藤架花	杉平正直見官	地方丹重助	活使才盛輝一訪	小倉井杉成觀極	杉浦海向高觀九	者色也
大八明高物	大八明高物	大八明高物	大八明高物	大八明高物	大八明高物	大八明高物
長屋壁張	大工	飯外	高橋	思田	千代	天孫院
早田	早田	早田	早田	早田	早田	早田
古物	古物	古物	古物	古物	古物	古物

廿月三十日田原館

日進

廿七日

日月 日月 日月 日月 日月 日月 日月 日月 日月

金貨存位 思付活に換
 若し支那の價屋なりとせば 金貨存位
 のたす助の如く 國力の以て貨幣を改
 易の如く 實に機械も甚し
 之銀貨制に國を隣邦 として亞洲の銀貨
 流通の中 の孤る 屋債制も亦あり 買
 之物も割せし とせば 白は屋債を夫 も幣
 切多し 目下切價 騰貴 と兼 輸入 と並
 買切 と懸 不 面 ら ま たり

三十三年

日月 日月 日月 日月 日月 日月 日月

黒田卿の金貨
 國貨銀行
 植木池田本教
 長江
 勝田
 藤田
 菅野
 植木
 菅野
 菅野

